

# 黙示録の記録

## 第8章

# 外からの攻撃を 受ける地球

著／ヘンリーモリス

訳／宇佐神 正海

## 黙示録の記録

### 目次

- 第5章 小羊が相応しい
- 第6章 創造主の大いなる怒りの日
- 第7章 大患難における聖徒たち
- 第8章 外からの攻撃を受ける地球
- 第9章 悪魔的災害

## 第8章 外からの攻撃を受ける地球

地球は、大きな巻物の最初の六つの封印が解かれた時、被った災害からの一時的休止を楽しみました。戦争と暴行、飢饉と旱魃、それに次いでものすごい地震がありました。最後には、非常に恐ろしかったので、創造主の御怒りから解放されるために異常に興奮して大声で叫んでいたのです。

しかし、その時、刑執行の延期がなされていました。いわば、その間、<sup>あいだ</sup>主がイスラエルから一四万四千人のキリストの証人を呼び出だし準備をしていました。天にある全体を見渡せる所から、ヨハネは、なお彼らの前途にある恐ろしい患難期の残りの時期に、部分的には、これらの証人の証を通して現れて来る大勢の信者たちを予言的に見ていました。

しかし、小康状態は長くは続かず、再び襲い始める裁きは、ますます激しくなります。開かれていない封

印が一つだけありましたが、以前あったすべての裁きよりはるかに激しい裁きが解き放たれます。

## 天における静寂

天の御座にあるすべての目は、いまや、もう一度、いやおうなしに小羊に引き寄せられました。キリストが最後の封印を紐解く用意をした時、待ち受ける静けさが大衆の上に及びました。封印の覆いを取り除くことは、さらなる一連の裁きすべてが実行に移される始まりとなることを彼らは誰ひとり理解していなかったのです。力ある天使が鳴らす恐ろしいトランペットの音をもって、火のような燃え盛る怒りの鉢を恐怖でわななく地球に注ぎます。

**黙示録8章1節** 小羊が第七の封印を解いたとき、天に半時間ばかり静けさがあった。

他の封印の各々が開かれた時、封印に対応する裁きが、すぐに地上とその住人に対し実行され始めました。けれど、第七の封印が紐解かれた時、恐ろしい静寂が引き続いて起こりました。天使の軍勢は黙して立ち、甦った聖徒たちは強い関心をもって見つめました。

この時の前後には、天と地には、音が満ち満ちていました。喜びに満ちた賛美の騒音と歌声が天の御座近くにいる軍勢から次から次へと繰り出されていきました。地上には、戦争の騒音と騒がしい自然界の雑音があり、世界中に、恐怖と創造主に対する冒瀆のことばと挑戦の叫びが鳴り響いていました。

しかし、突然、まったくの静寂―黙示録に記録されたただ一度の静寂―が全被造物に襲い掛かるように思われます。しかし、それは長く続きません。ヨハネは、それがおおよそ30分とみえました。事実それはすべての人にとって、もう一度永遠を考える機会となります。天にいる人々は黙考し祈ります。地上にいる人々は、何か天にある静けさを感じ取り、再び地上を襲う創造主の裁きの前に改心するか、小羊に対し今までより更に彼らの心を頑なにするかを新たに考えなければなりません。多くの人々は、創造主に対し悔い改めキリストを信じる信仰に立ち返ります。こうして、ヨハネが既に予言的に見ていたように、大患難の中から現れ出した贖われた群衆の一部となるのです。しかし、最も多くの者は反逆し続け、不敬虔さを増し加えます。

天における静かさと、地上での短い小康は、長く続きません。速やかに、広大無辺のドラマをもう一度始めます。

**黙示録8章2節** それから私は、創造主「神」の御前に立つ七人の御使いを見た。彼らに七つのラッパが与えられた。

「七」と言う数字は特に聖なる意味を持つ数です。このことは、創造主がまぎれもない七人の大天使(archangel)を指名している事実からも示されています。彼らは創造主の面前に立つ特権が与えられています。接頭語の大(arch)は「第一」をも意味し、彼らは天使の階位ですべての「権威と力」を持っているゆえに、そのように明示されているのが明らかで、創造主に最初に近づく特権を持っています。

勿論、天使たちは創造されており、創造主のように永遠の存在ではありません。彼らは他のすべての生き

物のように、創造の週の六日のうちに造られました〔出エジプト20章11節〕。彼らは創世記2章1節に言及された「天の万象」の部分として暗に示されている以外には、創世記の創造の叙述の中には述べられていません。しかし、彼らは創造主が「地の基が据えられたとき」「喜び叫んだ」と述べられている「神の子達」の中にいました〔ヨブ38章4〜7節〕。地の基は明らかに創造の週の第三日に据えられました。その時は創造主が原初の水から乾いた地が現れる様にされたときです。原初の水は、元来、「形のなかった」浮遊液の中に構成要素としてすべて維持されていました。

十中八九、天使の軍勢は、創造週の第一日に創造されました。創造主が空間と時間からなる宇宙を創造され、その中にご自身の御座を置かれたすぐ後です。これが特に詩篇104篇1〜5節から引き出された推論です。そこで私たちは創造主が「天を幕のように広げ」られた後、それから、「天使の霊たち」を造られ、その後、「地の基が据えられた」と告げられています。恐らく、七人の「御前にいる天使たち」は、彼らが創造された時点で彼らの立場は割り当てられました。

(訳者注章)聖書は全人類に与えられた説明書であるというのが訳者の長年にわたる聖書研究の結論であり、その原則に従ってこの部分を見直すと、この部分からの引用であるヘブル書1章7節との関連でこの風という言葉を理解できる。「光を衣のようにまとい、天を幕のように張り、……風をおのれの使者とし、火と炎をおのれのしもべとされる。節あなたは地をその基の上にすえて、とこしえに動くことのないようにされた。〔詩篇104章2〜5節口語訳〕」の4節の風は、「神(創造主)」は、御使たちを風とし、ご自分に仕える者たちを炎とされる……〔ヘブル1章7節口語訳〕とあり、詩篇の104篇4節の風は、天使を指すことをヘブル書で明らかに示しています。

大天使の一人の名はミカエルであることが判っています。彼はユダの手紙9節で「御使いのかしら(大天使)と呼ばれています。ミカエルはダニエル書12章1節でも「大いなる君」として、またダニエル10章13節では「天使の長の一人」と言及されています。黙示録12章7節で、ミカエルは巨大な天の軍勢を指揮すると述べられています。

ガブリエルは確かにこれら「最初の天使たち」の中の一人です。ガブリエルは「私は創造主のみに立つガブリエルです」〔ルカによる福音書1章19節〕とザカリヤに自らを紹介しています。また、ガブリエルは創造主のみ前から直接ダニエル〔ダニエル書8章16節、9章21〜23節〕とマリア〔ルカによる福音書1章26節〕に遣わされました。

他の五人の大天使の名は聖書に述べられていません。ユダヤの伝統(たとえばエノク書の外典)は彼ら四人の名前を、ラファエル(たとえば、外典トビト書にも述べられている)ウリエル、サラキエルとラゲエル、とその名を暗に示しています。ある者は、これら四人の天使が四つのケルビム(生き物)かもしれないと考えています。なぜなら、これら四つの生き物は常に創造主のすぐそば・御前で仕えているからです。彼らは最初の四つの封印を解くのに直接関与しました〔黙示録6章3、5、7〕。したがって、ケルビムたちはラッパを鳴り響かせるのに関与していたかも知れません。しかしながら、そうとは思われません。なぜなら、彼らは常に他の天使たちと注意深く区別されているように思われるからです〔たとえば、黙示録5章11節、特に15章7節〕。

ともかく、これら七人の天使たちは、七つの力あるラッパを鳴らす特権を与えられています。これらのラッパが一連の空前で、例のない自然災害を地に解き放つ合図です。しかし、これらのラッパは、大天使の声、または死人を墓から生き返らせるコリント人への手紙第一15章52節の最後のラッパを伴う、第一テサロニケ4章26節の創造主のラッパと同じではありません。これらの異なるラッパの用語と効果は、七人の天使のラッパに伴う災害とは全く異なるものです。多くの注解者は、特に「七つのラッパ」を「世の終わりのラッパ」

と同じにしようとしています。

黙示録8章3節　また、もうひとりの御使いが出て来て、金の香炉を持って祭壇のところ立った。彼にたくさんの香が与えられた。すべての聖徒の祈りとともに、御座の前にある金の祭壇の上にささげるためであった。

天使たちが各自のラツパを鳴らす前に、ヨハネは他の更に高位にある天使が御座の前にある祭壇の下に出て来るのを見た。この力ある天使は、祭壇の前で大祭司の役目を果たす者に他ならないと思われた。そして、創造主ご自身に創造主につく民のとりなしをする準備をしました。

この天使が大天使よりさらに高位にあることは彼の役目から明らかです。その天使は御座におられる創造主に聖徒の祈りを伝えます。ちょうど、イスラエルの古代の大祭司のように人と創造主の間の仲介者です。しかしながら、祭司の役目はただ象徴的なものでした。なぜなら、「創造主と人との間の仲介者も、人であるキリスト・イエス」ただ一人だからです〔テモテへの手紙2章5節〕。このようにして、私たちが、この天使をイエス・キリスト御自身と見るのを正当化するのです。キリストは他に多くの務めがあるのにここに現れました。この時は、キリストの慈悲深い仲介者としての役目であり、私たち自身の祈りを天の父に伝えます。「今や私たちのために創造主のみ前に出てくださった」のです〔ヘブル人への手紙9章24節〕。

しかしながら、祈る人はまず清められ、香が混ぜ合わせられ祭壇に捧げられた聖なる香によってよい香りを着けられなくてはなりません。しかし、香自体は、「聖徒たちの祈りである」香り〔黙示録5章8節〕ギリ

シヤ語で同じことばです)に過ぎず、御座にいる24人の長老たちが持った金の瓶に入れられていました。これら聖徒たちの祈りは、すべての聖徒の祈りと混ぜ合わせられ〔黙示録8章3節〕、すべて金の祭壇の上にある火に捧げられます。ヨハネは事実、すでに祭壇の下に、彼らの血の復讐を求めて創造主に祈っている殉教した聖徒たちの叫びを聞いていました。そして、これらの祈りも答えられようとしています〔黙示録6章9〜11節〕。

昔も今も受難している聖徒たちの応えられない祈りすべてを集めたこの場面を見るのは、理にかなっていません。創造主の前に、受難の最中においてさえ創造主に対する信仰と賛美を捧げたこれらの祈りは「香ばしい香りであって、創造主が喜んで受けてくださる供え物」です〔ピリピ人への手紙4章18節〕。大洪水の恐ろしい裁きの後、ノアが最初の祭壇で犠牲を捧げた時、「主は、そのなだめのかおりをかかれ」たのです〔創世記8章21節〕。イスラエルで香をたくための壇は、大祭司アロンが「あなた方の世々にわたる、主の前の常供の香のささげ物として、壇の上で香をたいた」〔出エジプト記30章8節〕と描写しています。このことはこのすべてを物語っていたのです。ダビデは「私の祈りが、御前への香として、私を手を上げることが、夕べのささげ物として立ち上りますように。」〔詩篇141章2節〕と呼ばわっています。

創造主は、私たちが信仰と賛美を持って祈るとき、喜ばれ、そして、これらの祈りは答えられる―おそらく、祈りが捧げられた同じ日ではなくて、もし前に答えられなかったとしても、少なくともヨハネが見た日のうちに答えられます。「ですから、私たちはキリストを通して、賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえるくちびるの果実を、創造主に絶えずささげようではありませんか。」〔ヘブル人への手紙13章15節〕。

黙示録8章4節　香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、御使いの手から創造主の御前に立ち上った。

天使の手には、金の香炉があり、その中で祭壇から取った火で香を焚きました。この場合、「香炉」に当たるギリシャ語は乳香という言葉に由来し、創造主を敬うために処方された香の主たる原料・乳香はイスラエルの聖なる幕屋で用いられました〔出エジプト記30章34節〕。香は非常に神聖なもので、自分で嗅いで楽しむために同じ調合の香を造ることは死で罰せられました。創造主の摂理において、天からの御子の降臨が特別な乳香のささげ物によって認められた〔マタイによる福音書2章11節〕のは偶然ではありません。なぜなら、御子はご自身が祭壇の上で燃やされ犠牲となる意図を持ち、そこから私たちのために天に昇って行かれました。

キリストは祭壇と香の両者であり、犠牲と祭司の両者です。「さて、私たちのためには、もろもろの天を通られた偉大な大祭司である神（創造主）の子イエスがおられるのですから、私たちの信仰の告白を堅く保とうではありませんか。私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした。すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいで、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」〔ヘブル人への手紙4章14～16節〕。

キリストは永遠に罪のための唯一の犠牲となられたので、私たちの日々の賛美と取りなしのささげ物は、聖なる創造主に受け入れられます。燃えさかる祭壇から立ち上るキリストの威厳ある苦惱の煙は、甘美な香の香りとなり私たちの祈りを天の御座にはるる運びます。私たちの違反のため釘で刺し通され傷ついた偉大な大祭司の御手の中に、私たちの告白と嘆願の叫びを空高く保っておられ、そして、創造主は聞き、答えます。

**黙示録8章5節**　それから、御使いは、その香炉を取り、祭壇の火でそれを満たしてから、地に投げつけた。すると、雷鳴と声といわずまと地震が起こった。

金の香炉から聖徒たちの祈りが空中をただよい天に向かっていきます。この同じ金の香炉が、いまや地に向かつて裁きを解き放つ火のような武器となります。罪のための聖なるささげものを焼き尽くした祭壇の炎は、いまや罪人の世界に降り注ぐ創造主の怒りの炎となります。創造主の愛のあふれる許しを撥ね退けたすべての人はキリストの正しい報復を受けなくてはなりません。「もし私たちが、真理の知識を受けて後、ことさらに罪を犯し続けるならば、罪のためのいけにえは、もはや残されていません。ただ、さばきと、逆らう人たちを焼き尽くす激しい火とを、恐れながら待つよりほかはないのです。」〔ヘブル人への手紙10章26～27節〕。

イエス・キリストがご在世中、主イエスが「わたしが来たのは、地に火を投げ込むためです。だから、その火が燃えていたらと、どんなに願っていることでしょうか。しかし、わたしには受けるバプテスマがあります。それが成し遂げられるまでは、どんなに苦しむことでしょうか。あなたがたは、地に平和を与えるためにわたしが来たと思っっているのですか。そうではありません。あなたがたに言いますが、むしろ、分裂です。」〔ルカによる福音書12章49～51節〕

キリストの十字架上の火のバプテスマは人を二つの大きな仲間集団に分けました。一つの仲間はキリストの苦しみに共に加わり（程度は決して同じではありませんが）、創造主の御国にキリストと共に永遠に入ります。他の仲間は、キリストの義とキリストの恵みによってさえ退けられ、キリストから離れ永遠に邪悪な

火の中で過ごさなければなりません。「だれでもモーセの律法を無視する者は、一、二、三の証人のことばに基づいて、あわれみを受けることなく死刑に処せられます。まして、神（創造主）の御子を踏みつけ、自分を聖なるものとした契約の血を汚れたものとみなし、恵みの御霊を侮る者は、どんなに重い処罰に値するか、考えてみなさい。」（ヘブル人への手紙10章28〜29節）

これら十字架を退けている人々は、最後に彼ら自身が火で清められなくてはならない不愉快な疫病になります。「人の子はその御使いたちを遣わします。彼らは、つまずきを与える者や不法を行なう者たちをみな、御国から取り集めて、火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ぎしりするのです。」（マタイによる福音書13章41〜42節）。さらに、キリストにある信仰とキリストの奉仕のゆえに苦しみにあつた人々は、最後に祭壇の下の殉教者のようになり、彼らの祈りが答えられ、キリストのゆえに彼らの敵になったキリストの敵に下る正しい裁きを見るのです。「つまり、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、創造主にとって正しいことなのです。そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現われるときに起ります。そのとき主は、創造主を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。」（IIテサロニケ人への手紙1章6〜8節）。

こうして、火が地上に投げ込まれます。これは静かな合間の後に来ます。そして、この合間に多くの人々は彼らの心を創造主に対しかつてないほどに頑なにします。彼らは、地球に対する裁きのしほしの小休止はキリストに勝利したことを示すと考えます。しかし、いまや、静寂は破られます。祭壇からの最初の燃えさしは、地に雷と稲光を伴う世界的規模の大暴風のかたちで届き始めますが、雨はなお降りません。これはなんと恐ろしい光景でしょう。太陽の光の満ちた空から大音響を轟かせる稲光、鉛色の重苦しい大気。大気物理学者はこの異常な大気の説明のため召集されるでしょう。そして、恐らくある仮説が立てられ、しばらくはおびえていた庶民の混乱した「声」を静めるでしょう。

しかし、次いで他の大地震が世界中を駆け巡ります。警告の音がますます騒がしくなります。また、御座の周りには、稲光と雷鳴と声がありました（黙示録4章5節）、しかし、七人の大天使がラツパを鳴らすとき、襲い掛かるうとしている大いなる裁きの前兆として、これらが地上にもあるように思われます。

## ラツパの裁き

天での短い何か悪いことが起こりそうな予感のする静けさが、いまや破られました。聖徒たちの祈りが総て創造主の前に提出され、それらの祈りはいまや答えられなくてはなりません。大勢の新しい信者たちの証と突然の異常な嵐と地震によって、すさまじい裁きが始まることを地の住人たちは新たに警告されましたが、彼らは悔い改めませんでした。

**黙示録8章6節**　すると、七つのラツパを持っていた七人の御使いはラツパを吹く用意をした。

天使たちは、ヨハネが見つけていたように半時ほどラツパを鳴らす準備をして待っていました。しかし、彼らは突然行動を開始しました。彼らは「吹く用意をした」。彼らの鳴らすラツパの音は不明確な音声ではあ

りません。

これらの天使たちは、彼らの特別な任務をするために確かに長い間待っていました。「御使いはみな、仕える霊であつて、救いの相続者となる人々に仕えるため遣わされたものではありませんか。」〔ヘブル人への手紙1章14節〕とあるように、キリストの力ある天使たち〔エテサロニケ人への手紙1章7節〕は、地上でのキリストの救いの業を進めるためにものすごく忙しかった。これは「御使いたちもはつきり見たいと願っていること」〔1ペテロの手紙1章12節〕です。七人の「主の御前に使える天使たち」は確かに総ての天使たちの中で最も気にかけており、彼らは完全に準備していました。彼らのラツパの響きは、地を一掃し清める課題に取り掛かるため、天の軍勢が行動に移す合図となります。大勢の天使たちは地球の最先端の科学者より自然の体系と過程に対し遙かに優れた理解力を持っており、創造主の命令に応じて、自然界の体系と過程に働きかける時と所と速度を大いに制御することが出来ます〔詩篇103章19、21節〕。大天使たち、合図、いわば、ラツパが吹かれる時、天の軍勢からなる大軍隊が出勤し、それによって、大洪水以来地球が経験したことのない最も恐ろしい自然界の大変動が引き起こされます。

**黙示録8章7節 第一の御使いがラツパを吹き鳴らした。すると、血の混じった雹と火とが現われ、地上に投げられた。そして地上の三分の一が焼け、木の三分の一も焼け、青草が全部焼けてしまった。**

地の住人たちは驚くような雷雨とすごい地震をちよと経験したところで、今度は、雹を伴う強大な暴風雨です。打ちつける雹に伴って火の玉と血のしずく（恐らく血の色をした水・・・血自体は90%以上が水です。）

が降り注ぎました。彼らは、これまでこのような現象を見た事はまったくなく、非常に恐れ、おののきます。

歴史上で以前に同じような災難が、一つの特別な地を不意に襲いました。「モーセが杖を天に向けて差し伸ばすと、主は雷と雹を送り、火が地に向かって走った。主はエジプトの国に雹を降らせた。雹が降り、雹のただ中を火がひらめき渡った。建国以来エジプトの国中どこにもそのようなことなかった、きわめて激しいものであった。」〔出エジプト9章23、24節〕

人々は古代エジプトに起つたこの独特な出来事を説明するために、いろいろな自然主義的解釈を試みました。インマヌエル・ヴェリコヴスキーは、この現象を侵入しつつある彗星からの放電によると考えました。他の人々は、大地に沿って走る火を「聖エルモの火」として知られる極めて稀な現象であつたと示唆しています。これら示唆されているもの一つも満足のいくものはなく、モーセ自身の記録は、モーセが杖を天に向けて差し伸ばしたとき、モーセの祈りに応えて主から送られた奇跡と記しています。それは現行の自然現象（雷、雹、火、雨）を含み、したがって、おそらく摂理による奇跡（特別に自然現象に影響を及ぼすいくつかの要因を組織化したもので、天使の働きを通してなされた事でしょう）で、創造の奇跡（質量、エネルギー、生物体の直接の創造で、創造主ご自身の直接の力を必要としている）と云うべき出来事でした。

エジプトの災害の正確な性質がどうであつたとしても、最初のラツパが吹かれる時にやって来る裁きと同じではあり得ません。後者は局地的というよりも世界的規模で、さらに「血が混じる」のです。エジプトの場合に自然現象として起こつたとしても、今回は同様に自然に起こつた同じような状況とすることは、なおいっそうあり得ないように思われます。それは確かに、人々は創造主の聖なる裁きと認めなければならぬほど異常で、独特でさえあり得るのです。

天使の軍勢が、多くの彗星の一つの通り道を脇に逸らせることが可能になるのかもしれない。太陽系には多くの彗星があり、それで地球は彗星の尾を通り抜けまします。私たちがよく知っている最も素晴らしい彗星（ハレー彗星）は、その燃えるような彗星の尾の中に地球を巻き込むために彗星の通常の軌道からあまり遠く踏み外す必要はないはずで、このようなことを科学者たちは、今進行中の経験資料で持ち合わせていないので、彗星の尾の中に地球を巻き込むような体験で、この節に記されたような現象を生じるか否かを私たちは知り得ません。

他の可能性は、世界的規模の火山噴火、世界的規模のすさまじい地震の通常の結果かもしれない。空に向かって吹き上げる水蒸気の塊りは、激しい上昇気流でおそらく凝縮し雹の塊になるでしょう。そして、燃えている溶岩がシャワーのように「地上に投げ」つけられるでしょう。閉じ込められた人や動物の血は、雹や溶岩と混じりあうかもしれません。またことによると、液状になった水滴のシャワーが塵やガスで汚染されて血に染まった血の色をしているように見えるかも知れません。

これらすべてが、ずば抜けた推論によるのは明らかです。このような大災害と比べうる観察されたデータは殆どなく、おそらく、復讐する天使たちが自然史に全く新しい出来事を生じさせるため、自然過程を再び調整することで、それによって創造主ご自身が彼らに語っておられることを、人に印象付けようとしていることでしょう。

そのようにして生じた火は、長引いた旱魃で既に乾ききった地上の木や青草に燃え移り、地上を焦土と化し、世界の森林の三分の一は完全に地に向かって焼け落ちます。人の命の喪失がこの特別な裁きで惹き起こされるか否かは、知らされていないが、少なくとも、どこにいる人にも大きな警告となり莫大な財産の損害を与えるに違いありません。

**黙示録8章8節** 第二の御使いがラツパを吹き鳴らした。すると、火の燃えている大きな山のようなものが、海に投げ込まれた。そして海の三分の一が血となった。

かろうじて雹が落ちるのが止み、火が燃え続けるのが止んだ時、地上ではさらに大きな衝撃が感じられました。大きな山のような火の塊が海に衝突しました……恐らく地中海でしょう。

またもや、この山が何であるかを確実に決める事はできません。なぜなら地球がそのときまでこのような大災害を経験したことはないからです。恐らく地上の山ではないでしょう。……言うなれば、爆発した火山の山頂……ヨハネはこのようなものとしてそれを認めたのです。その代わりに、ヨハネはそれを大きな山の様だったと言っています。地球に向かって突進してくる大きな岩の塊、可燃性のガスで取り巻かれ、天使の群れによって地球に向けて進められ、それが大気圏に入ったとき発火する。これが、たぶん現時点で、われわれが取り得る自然科学的な説明と思われまします。ことによると、巨大隕石、小惑星、他の惑星の一つの軌道を回っている衛星でさえも、現在なお私たちがほとんど知らない宇宙の力によって、地球に向かって押し進められるかもしれないと考えられます。

海と実際に衝突する所はただ一か所ですが、全世界がそれについて知るのには明らかです。人々は宇宙から近づいて来つつあるそのものがある時間の間観察するでしょう。それから、地球の重力圏に入り、容赦なく地球の表面に渦を巻いて進んでいきます。おそらく、幾つものテレビのカメラはそれに焦点を合わせていて、

実際に着水する場面は全世界のテレビで見られるでしょう。

衝突時のものすごい爆発は、原子爆弾の爆発さえ小さく感じさせ、想像を絶する恐怖となります。海にいる生き物の破壊は途方もなく大きくなり、巨大な「赤潮」のように有害な水は、まもなく他の海洋すべての水に広がり、こうして海の三分の一は「血になり」ます。

また、これも大昔エジプトで起こった出来事と似た現象で、その時、「……ナイルの水はことごとく血に変わった」〔出エジプト記7章20節〕とある通りです。けれども、エジプトでの局地的災害の原因は、モーセの杖による以外は示されていません。そして、それはエジプトの魔術師にも同じように真似られていました。類推すると、おそらく、その地域を害することは、ナイル川とエジプトの川に向かってきた隕石または彗星からの水によって、同じように起こったかもしれないかもしれません。それは、モーセの祈りに応えて働いた聖なる天使たちによって行われただけでなく、魔術師たちの主人に対する必死の嘆願に込めて、サタンの配下にある天使たちによっても行われた可能性があるのです。

水を血に変える能力は、海を死んだ動物の血で満たすか、または、もつと可能性のあることは、海を化学的に、または生化学的に変える事によって、血の色をした水に変えることによるのでしょう。後者は、死んだおびただしい微生物によって害を受けること（最近の海でしばしば起きよく知られた「赤潮」のような現象）によるのかもしれませんが。古代イスラエルのこのような感動は、彼らの歌〔詩篇78篇44節、105篇29節〕で詳しく話されました。同じ感銘が、将来来るこの大いなる日に世界の住人になされる感銘、その日、突然、世界の海の三分の一が完全に血のようになることがよく推察されるのです。

さらに、創造主から遣わされた二人の証人が、このまさに同じことを予報し祈ったことも周知の事実であったことを考慮して、心理的効果はそれだけ大きくなります。その同じ二人の人が世界を既に苦しめている世界的規模の早魘かんばを呼び求めたのです。「この人たちは、預言をしている期間は雨が降らないように天を閉じる力を持っており、また、水を血に変え、そのうえ、思うままに、何度でも、あらゆる災害をもって地を打つ力を持っている。」〔黙示録11章6節〕

地に住む人々は、確かに、これらの大きな災害は彼らの邪悪さに下された創造主からの裁きであるとの主張をよく知っています。しかし、多くの人はただ彼らの自己義認の思いと反抗的ずうずうしさを頑なにするだけで、彼らは地獄にまっしぐらに向かい続けます。

**黙示録8章9節**　すると、海の中にいた、いのちのあるものの三分の一が死に、舟の三分の一も打ちこわされた。

もし水の三分の一がだめになるなら、三分の一の魚や他の水生生物が死ぬのは意外なことではなく、こうして、中毒と悪臭と恐怖が加わります。陸生動物の命に何がなされるかは述べられていませんが、これもまたひどく損なわれるでしょう。草原は、焦土と化し、樹の三分の一は第一のラツパの災害で焼き尽くされました。そして海生生物の三分の一が第二のラツパで死にます。これらは、世界の食物連鎖の多くの生物のうちで、最も下等ではあるが最も土台となる構成要素をなしており、したがって、彼らの破壊は多くのより高等な生物系にドミノ倒しの様に影響を引き起こすに違いありません。

しかし、どうしてこれが「船の三分の一」を破壊するのでしょうか。答えは、おそらく、水を損なった同

じ巨大な衝撃は、また巨大な津波を引き起こすはずです。その津波は、たとえ、衝突のすぐ付近にあるものを除いて、大洋の中の船にはほとんど影響がないとしても、岸辺に錨を下ろしていた多くの船を粉々に打ち砕くでしょう。人的生命の損失は、生物圏と水圏での大破壊にもかかわらず少ないでしょう。経済的損失は勿論大きくなり、これらの出来事は人類に対し、創造主とキリストに反逆し続ける人々に、確かに大いなる悲劇が差し迫っている事に関する途方もない警告となるのです。

**黙示録8章10節** 第三の御使いがラツパを吹き鳴らした。すると、たいまつのように燃えている大きな星が天から落ちて来て、川々の三分の一とその水源に落ちた。

それから、地に住む人々は前の空からの衝撃のショックから回復する前に、天文学者はなお他の「恐ろしいことや天からのすさまじい前兆」〔ルカによる福音書21章11節〕を確認します。第二のラツパの響きの下、大きな山が海に落ち込み；第三のラツパの響きの下、大きな星が天から落ちます。両方ともに天からの侵入者のように思われますが、一方は主として固形（山）であり、他方は主として液体で、たいまつのように燃えているのです。片方は固い塊であり海に激しい音を立てて衝突し、他方は地球に近いがやや離れたところに落ちるの燃える大きなものを地球上のあらゆる（地と海）に巻き散らします。

前に述べたように、聖書にある「星」という用語は、どのような天体をもそのように呼ぶことが出来るのです。終わりの日に星が天から落ちる事に関する他の引用があり〔マタイによる福音書24章29節、マルコによる福音書13章25節、黙示録6章13節〕ますが、これは最も詳細で特別で、星の名さえ与えられています。

この場合、星のかけらは海だけでなく川々にも落ちます。そして、川々の三分の一を汚染します。命に関わるような化学物質が「水の源」にさえ汚染します。「水源」のギリシャ語は井戸をも意味し、ヨハネによる福音書4章6、14節では井戸と訳されています。このように、水源は地下の水の源に対する言及で、泉や井戸を通してそれを飲むのです。これらは、外宇宙にある命に関わるような投射物から出てくる流出物によってさえ汚染されるのです。

**黙示録8章11節** この星の名は苦よもぎと呼ばれ、川の水の三分の一は苦よもぎのようになった。水が苦くなったので、その水のために多くの人が死んだ。

前の裁きによって有害になった海の水は、海の動物に致命的結果をもたらしますが、人には直接の影響をほとんど与えません。しかし、この新しい裁きは、人の飲料水にも有害な影響を与え、多くの人々が死にます。

「苦よもぎ」は、文字通り、アブサン（苦ヨモギを主成分に含む強いリキュール酒）として知られている致命的な液体の（アルコール飲料）材料で、ギリシャ語のアブシントスに由来しています。この言葉は新約聖書ではこの節だけに用いられています。したがって、その由来や詳しい意味は定かではありません。「苦よもぎ」という用語は、旧約聖書でもしばしば用いられています。旧約聖書ではヘブル語ラーナの翻訳で、かつて、欽定訳聖書では「hemlock:ドクニンジン」と訳されました。示唆されている事は、ある種の根に由来した毒〔申命記29章18節〕です。それは非常に苦い〔箴言5章4節〕し、酩酊をきたし〔哀歌3章15節〕、最後に死をもたらします。それは「毒草」〔申命記29章18節、哀歌3章19節〕として知られている他の毒物と関係があります。この物質は、十字架

上のキリストの感覚をにぶらせる飲み物として用いられた「詩篇69章21節、マタイによる福音書27章34節」が、キリストは飲む事を拒否しました。

この致命的な星の物質に関する正確な性質が何であろうと、それは明らかに飲むと死ぬ毒物で、多くの人がそれに汚染された川や井戸からの水を飲む結果死にます。その結果として、その星は、おそらく、死をもたらず性質を回想して、その記念に、実際に「苦よもぎ」という公認の天文学的（または民間に広く普及している）名が、与えられています。地球に近付いているその光のスペクトル分析をし、それが地球に衝突する前にその天体に適切な名を付け、人々に警告出来る可能性はほとんどありません。けれども、もしその通りなら、この警告は十分ではあり得ません。なぜなら多くの人がいずれにせよ有害な水で死ぬからです。

川の三分の一とその水が有害になったのが同時であることも心に留めて下さい。すでにいくつかの現象を通して経験したこの繰り返しされる三分の一の割合は、地球の住民にとって、いろいろな災害が行き当たりばったりではなく、管理された聖なる裁きである事を示すなお一層の証拠となります。

黙示録8章12節 第四の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、太陽の三分の一と、月の三分の一と、星の三分の一とが打たれたので、三分の一は暗くなり、昼の三分の一は光を失い、また夜も同様であった。

地球とその住人が最初の三つのラッパの裁きの影響でなおふらふらして、科学者と政治家たちは、必死にそれらの原因の自然主義的説明と急速な救済策を見出そうとしている間に、なおその上に、天からのラッパの音が炸裂したのです。今度起こった自然現象は、どのように科学知識を動員して理解しようとしても無

理で、それに反し、実に常軌を逸したものです。

ラッパが鳴ると、天にある天使の大軍勢が、それに応えて、太陽と月と星を打つのです。太陽の日の光は三分の一に減じ、夜の月と星の光も同じように三分の一になります。この現象は空にある単なる雲や霞（かすみ）では説明できないけれども、天体を打つことによって光の出力を三分の一に減らすような結果になると言われているのですから。

反射光によって輝く月や惑星は、勿論、太陽の光が減るなら、それらの光も減るのです。しかし、どうして燃えている太陽や星が、この妙な方法で影響を受けるのでしょうか。

さらに、その効果はほんの一時です。なぜなら、しばらくの後、太陽の燃焼力は実際に強化され、通常のエネルギー出力を遥かに超えたものになるのですから（黙示録16章8〜9節）。ついでに言えば、繰り返された句「三分の一」はもともと一語に過ぎなく、「三分の一」とされる方がよいはずで

このすべてで最も単純な説明は、なんとなく、一時、一日でも、数日でもよいが、天にあつて目に見える光るものは、ただそれらの三分の一の要因で出力を減らすように内部反応を減らします。その結果、たとえ光を暗くする霧とか何かそれに類するものが空に全くなくても、昼と夜の輝きは通常の僅か三分の二になります。（ここでいう単純な説明とは、科学的に理解できる人は誰一人なく、説明不足との意味で用いています。）自然主義の科学者は、こんなことは不可能だと反対するかもしれませんが、けれど、これは、彼の知識を超えているとすべきです。太陽の内部の反応と太陽表面における外部への反応の両方の性質はまだ知られていません。最近まで、太陽物理学者は太陽の外部に放射するエネルギーの出力は主として太陽内部での熱核融合反応の結果であると堅く信じていました。しかしながら、今や、このような反応によって生じるはずの太

陽からの太陽ニュートリノ（中性微子）の流出の欠如が原因で、すべての問題を完全に考え直すようになってくるのです。太陽の大きさが計測可能なように明らかに縮小している最近の証拠は、太陽のエネルギー放出の多くは重力崩壊の結果であることを明らかに意味しています。恐らく、このことは他の星でも同じように事実なはずです。

このように、もし太陽の重力縮小の速度が一時ゆっくりになるならば、太陽の光の放出も恐らくゆっくりになるでしょう。天使たちは、何らかの方法でどうにかして、太陽自体の重力を減らすのでしょうか？重力とは何かを明確に知っている人はいないので、それは天使には出来ないとはだれも言えないのです。

太陽物理学者でさえ、いまだに、重力の働く過程も、太陽放射の過程に関する完全な性質も、本当には理解していないし、少なくとも、創造主に遣わされた力ある天使はこれらの事を理解していると思われる（そうでなければ、少なくとも創造主は御存知で、それを天使たちに教えることが出来る）ので、創造主の配下にある天使たちが、すべての天体の通常の活動で、この途方もない完全な出来事を完全に執り行う事が出来ると仮定して間違いありません。

同じ理由で、この現象の驚くばかりの特徴は、地上の疑い深い自然主義の科学者たちに見逃されるはずはありません。さらに、太陽熱の突然の喪失は、確かに、世界の温度の厳しい低下と地球の気象学と気候学に広範な混乱を引き起こします。予告不可能な猛烈な大気の嵐が次に来るかもしれないし、同時に植物と生き物の共生関係を妨げるかもしれません。イエスの予言が、かつてなかったほどに成就します。「そして、日と月と星には、前兆が現われ、地上では、諸国の民が、海と波が荒れどよめくために不安に陥って悩み、人々は、その住むすべての所を襲おうとしていることを予想して、恐ろしさのあまり気を失います。天の万象が

揺り動かされるからです。」〔ルカによる福音書21章25〜26節〕

**黙示録8章13節** また私は見た。一羽のわしが中天を飛びながら、大声で言つのを聞いた。「わざわいが来る。わざわいが、わざわいが来る。地に住む人々に。あと三人の御使いがラツパを吹き鳴らそうとしている。」

七つのラツパのうち四つのラツパが吹き鳴らされ、その結果、大きな驚くような災難が地に齎もたらされました。しかし、今、短い静寂があり、ヨハネは、見たまた聞いたとして、これら起こるすべての大いなる出来事の実際を目撃者であり、同時に聴き手である事を私たちに気付かせます。（私は見た。…聞いた）

そして、彼が見、聞いているのは、なお、別の天使で、別の特別な使命を持っています。この天使は空を飛びながら、「地に住む人々に」さらにもっとすごい災いが来ると警告して叫んでいます。その光景自体びっくりさせるものです。最近の恐ろしい総ての出来事の後、地の住人たちは、突然、創造主に従う天使たちの信じられない光景に否応なしに直面させられます。天空を横切り行ったり来たり、一つのところから他のところ地上にいるすべてのものが聞こえるような恐ろしいほどの声で叫びながら飛び回っているのです。このニュースはすばやく広がり、疑いもなく、この光景は世界中のテレビに放映されます。

なお生き残っていたヒューマニズム（人間中心主義）に立つ懐疑論者はだれでも、彼らが長い間否定してきた見えない超自然的世界を、この驚くべき光景で、最終的に事実として認めざるを得なくなるのです。彼らの目の前で、天空を飛びまわっている現実の天使を彼らは見ての声を聞きます。

そして、天使のメッセージは、三重の災害の一つです。天使は地の住人に、彼らがつい最近経験した四つ

の恐ろしい自然界の大激変を、創造主が、ラツパを吹き鳴らす四人の大天使を通して直接下されたことを知らせます。

なおその上に、さらに三人の天使とさらに三つのラツパがあり、その各々は今まで経験したことのないさらに大きい災害の合図であり、これは空中を飛び交う天使たちによる警告の音でもありました。創造主は、「ただ一人も滅びる事がなく、すべてのものが悔い改めに至る事を望み、・・・ながく忍耐しておられるのである。」「IIベテロの手紙3章9節」そして、創造主はなお親切に彼らに警告し招いていますが、この段階で耳を傾ける者は僅かです。

この天使は実際は古い写本のいくつかにあり、最近の翻訳の多くがそう訳しているように飛んでいる鷲である可能性があります。けれども、鷲は人のことばを話せません。もしこの飛び交っている伝令が鳥に過ぎないなら、この説明はなんとも幼稚です。最もありそうな事は、欽定訳が正しく、その伝達者は実際に天使とするものです。

もう一つの可能性があります。恐らく、両方のテキストが正しく、飛び交っているのは天使と鷲です。四つの力あるケルビムは、黙示録四章の「生き物」で、天使の階層で実際に高位にあり、十中八九は、大天使の上にさえ位置しているのです。(サタン自身墮落以前すべてのケルビムの最高位のものであった)。これらの第四のものは「飛ぶ鷲のよう」【黙示録4章7節】な外観であったといわれています。この力ある天使のようなケルビムは三つの災害を警告するメッセージを持って天の中央にいた「飛ぶ鷲」です。天使、ケルビム、鷲のなんであろうと、もちろん、それは地の住民が恐れつつ次のラツパの音を待つように、地の人々の注意をひくためになされた独特の警告と形と内容です。